TAKE FREE

2025.3.25.

SIAF LOUNGE ANNUAL

2024年度

ここSIAFラウンジは、札幌国際芸術祭（SIAF）2014が閉幕した翌年の2015年に開設され、以降SIAFの広報的拠点として機能してきた。

SIAF2024では「未来劇場（東1丁目劇場施設）」や札幌芸術の森美術館のようなメイン会場としてではなく、サテライト会場として位置付けられることになったため、SIAFラウンジの日々の運営と並行しながら、2014年から続くSIAFのこれまでや、都度支えていただいたボランティアの方々、アウトリーチ活動について紹介する展示を企画し、「SIAFアーカイブセンター」と名付けた。

SIAFアーカイブセンターは、普段は常設の「まちの歴史展示室」として使用されている札幌市資料館の一室で展開した。SIAF2014の開催前からSIAF2024までの出来事を年表としてまとめた❶「札幌国際芸術祭の歩み」、歴代のSIAFゲストディレクターたちの考えや、大事にしていた言葉を開催年毎にキーワードとして抜粋した❷「SIAFをとりまく〝キーワード〟」、SIAFを支えてきたボランティアやサポーターの動きや関わりをまとめた❸「札幌国際芸術祭と市民参加」、SIAF2024の開催に向けて普及啓発を目的として新たに開始した、市内小中学校への出前授業やアウトリーチプログラム❹「SIAFスクール」の紹介と、大きく4つの展示を行った。その内容は、ここ数年に渡ってSIAFラウンジが実践してきた、過去のSIAFのアーカイブをいかに活用するか、試行錯誤してきた取り組みの集大成と言える展示となったのではないかと思う。

実際、今回初めてSIAFを知った方向けというよりは、SIAF2024のサテライト会場らしく、コア層向けな企画だったかもしれない。だが、札幌国際芸術祭という事業のそもそもの発端や、これまでどのような会場でどんな作品が見られたのかといった過去の情報に触れる入り口となったことには、後々評価の声も上がっていた。

他方SIAFラウンジでは、これまでのSIAFの各テーマをモチーフにしたオリジナルドリンクの販売や、雪の降る地域ではおなじみ（?）の「オリジナル米袋ソリ」の制作キット、「リサイクルエコカイロ」など、独自開発したグッズの販売を行った。また札幌市資料館2階のSIAFプロジェクトルームでは、SIAFスクールでも活用した、アーティストが開発したプログラミングアプリケーションや漫画制作アプリケーションの体験ができるブースが設置された。

そして、SIAF2024が閉幕した後、SIAFラウンジは、息つく間もなく次なるSIAFへ向けての計画を立て、それを実践していくことを迫られた。しかしながら、次のSIAFに関する内容が公開されるまで、新しい情報はまだ少なかったため、これまでと同様、アーカイブを活用した企画を行った。

まず、SIAFアーカイブセンターの手応えや反応から、その展示内容を再構成してSIAFラウンジ内の掲示板で展示した。具体的には、SIAF2024閉幕後に発行された、記録集でもあり芸術祭開催のノウハウ本である「新しい芸術祭のつくり方」*1のキーワードを追加した。こうして再展示した「SIAFをとりまく〝キーワード〟＋（プラス）」は、ポップなビジュアルも目を惹いたのか、来室された方が一つ一つ丁寧に見ていく姿が印象的だった。

また、SIAFラウンジの機能の一つでもあるライブラリー企画として、これまでオリジナルフリーペーパーsakusakuで「ラウンジのほんだな」として取り上げてきた書籍の展示を定期的に行っている。一冊一冊に執筆したスタッフの思い入れがあり、魅力的な本ばかりなので、面白そうだと感じたら、ぜひ実際に本を手にとって頂きたい。

その後、SIAF2024の関連本も徐々に配架を進め、2025年1月から開催されたSIAFプレイベントでは、市内で開催される冬のアートイベントの周遊プログラム「みんなでウパシテ!!」*2の拠点として、同企画の紹介や周遊を促す呼びかけを行った。

2025年2月には、ついに2027年の冬、次回のSIAFを開催することが発表された。これからのSIAFラウンジは、札幌国際芸術祭実行委員会事務局が掲げた「for SIAF2027」にのっとり、様々な企画や取り組みを行っていく。今年で開設から10年目の節目となるSIAFラウンジとその取り組みを、今後も楽しんでいただけたらと願っている。

SIAFラウンジスタッフ　杉本直貴

＊1「新しい芸術祭のつくり方」
札幌国際芸術祭2024（SIAF2024）の記録集。SIAF2024の報告のみに留まらず。この芸術祭をどうつくっていったのかを「札幌国際芸術祭の事務局視点」で振り返る内容となっている。

＊2「みんなでウパシテ!!」
札幌国際芸術祭が主催する、2025年1～2月に札幌市内で開催される冬のアートイベントをまとめて楽しむプログラム。アイヌ語の「雪＝ウパシ」に由来するこの言葉には、「未来に向けて走り出してみる、互いに気づきあってみる」という意味が込められている。SIAF2024のアイヌ語サブテーマとして生まれ、公募・連携プロジェクトの合言葉になった。

ラウンジのほんだな
lounge no hondana

鷲尾和彦 著『アルスエレクトロニカの挑戦：なぜオーストリアの地方都市で行われるアートフェスティバルに、世界中から人々が集まるのか』（学芸出版社）

Andreas J. Hirsch 著『Alchemists of the Future：Ars Electronica Futurelab The First 25 Years and Beyond』（Hatje Cantz Verlag）

『WIRED日本版 VOL.45 AS A TOOL：気候危機を生き抜くツールカタログ』（プレジデント社）

第 12 回テーマ「SIAF2024 関連書籍」

SIAF2024 を終えて、SIAF ラウンジの本棚には SIAF2024 に関連する書籍を集めたコーナーができました。今回はその中からいくつかの書籍を紹介していきます。

まずは、SIAF2024 ディレクターの小川秀明氏が所属するアルスエレクトロニカについての本をご紹介。オーストリア・リンツでは最先端のメディアアートフェスティバルをはじめとした「アルスエレクトロニカ」の活動が注目を集めています。『アルスエレクトロニカの挑戦』には、そんなアルスエレクトロニカの発展の歴史や展望がわかりやすくまとめられています。

また、『Alchemists of the Future：Ars Electronica Futurelab The First 25 Years and Beyond』は、小川ディレクターが共同代表を務めるアルスエレクトロニカフューチャーラボの設立から 25 年の歴史を振り返ることができる一冊。これらの書籍を読むと、小川ディレクターが SIAF2024 で掲げた構想を理解するヒントが得られるかもしれません。

さらに、SIAF2024 コーナーにはイニシアティブ・パートナーに関する本も配架しています。『WIRED』日本版の『WIRED 日本版 VOL.45 AS A TOOL：気候危機を生き抜くツールカタログ』には小川ディレクターのインタビュー記事を収録。本誌は、あらゆる物を可能性を秘めたツール（道具）として捉え、気候危機の時代を生きていくためのツールをカタログ形式で紹介しています。『WIRED』日本版は SIAF2024 でポッドキャスト「SIAF AS A TOOL」を開局し、札幌文化芸術交流センター SCARTS にて公開収録も行いました。「アート」「テクノロジー」「芸術祭」をツールとして未来に向けて何ができるのか？ポッドキャストと合わせてチェックしてみてください。

そのほか、SIAF2024 参加アーティストに関する本も必見です。未来劇場（東 1 丁目劇場施設）にて象徴的な作品を担当したチェ・ウラム氏の『［Stil Laif］』や札幌芸術の森美術館で展示を行った明和電機の『魚器図鑑』などの作品集をご覧いただけます。お気に入りのアーティストの作品を見るほか、訪れていない会場の参加アーティストについて知るのも楽しいかもしれません。ぜひ、SIAF2024 コーナーの書籍を手に取ってみてくださいね。

Café のちょっといい話？

SIAF ラウンジのカフェで
お客さん用としてそろえている「カップとプレート」。
フィンランド生まれの「イッタラ Teema」の
なかから選んだものを、ずっと使っています。

iittala / Teema　カップ（200ml）

流行とは無縁の寸胴ボディ。スタッフ目線で恐縮ですが、丈夫で洗いやすいのもよいところ。故郷フィンランドではお茶の時間をはじめ、お菓子づくりなど調理のときにも使われているそうです。溶かしバターをつくったり、シナモンロール用の黄身を入れておいたり…でしょうかね。

iittala / Teema　プレート（径 14cm）

シンプルを極めたようなお皿です。「使い方の幅があって」「飽きずに使えるように」。デザイナー、カイ・フランクの思いがカタチになっています。ラウンジではスコーンをちょこんとのせてテーブルへ。そしてなんと、カップとあわせてソーサーとしても大活躍中です。

マンガ SIAFラウンジの日常

SIAFラウンジとわたし。

札幌に引っ越してきた2023年、元々ご縁のあった漆さん（SIAFラウンジ運営責任者）にSIAFラウンジでのお仕事をご紹介いただきました。

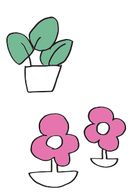
漆さんには小学生の時からお世話になっていますが、「父の知り合いの陽気なお兄さん」のイメージだったので、漆さんの本拠地北海道に来てやっと、何をしていた人なのか知ることが出来、謎が解けた気分です。あと、お兄さんからおじさんになってました。

ご紹介いただいたSIAFラウンジで働き始めて1年ちょっと。

ラウンジにはカフェのお仕事以外にも、SIAFやアートイベントに関わるお仕事があり、想像していた以上にたくさんの経験ができました。

ここで新しくできたご縁を大事にしながら、これからも札幌やSIAFについてもっと詳しくなっていきたいなと思います。

SIAFラウンジスタッフA



ふむふむサポーターインタビュー

by SIAFラウンジ

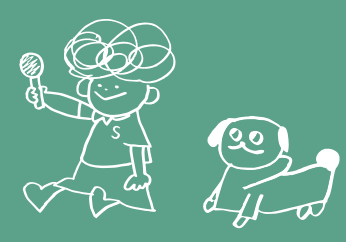
協力：NPO法人ezorock

［お話を伺ったみなさん］

久田さん（60代男性）＊
柳澤さん（60代女性）＊
竹中さん（20代女性）
谷口さん（60代女性）
宮川さん（60代男性）＊
猿橋さん（60代女性）
成田さん（50代女性）＊

＊：SIAF2024でガイドとしても活動

昨年閉幕した札幌国際芸術祭（SIAF）2024で、来場者と芸術祭を繋ぐ役割を担った市民がいました。それが「ふむふむサポーター」。SIAF2024では、会場の案内役を務める「ふむふむサポーター」と、ガイドプログラムを通して来場者の体験をサポートする「ふむふむガイド」の２つに分かれて、芸術祭を支えました。今回は、次のSIAF2027に向けて、さっぽろ雪まつり大通６丁目会場でのプレイベントに参加したふむふむサポーターの振り返り会にお邪魔し、サポーターのみなさんにお話を伺いました。



参加した動機は何ですか？

久田：スポーツボランティアからのお誘いがあり、何かお手伝いできればと。SIAF2024でサポーターに参加し、頑張ってふむふむガイドにもなって、その時の研修が有意義だったので、プレイベントも引き続き参加しました。

柳澤：もともと美術館を見るのが好きで、オーディオガイドを使って回ったりしていたんですが、たまたま参加した学芸員ツアーで、ちょっとした雑談やトリビアを話してくれたのが面白くって。型通りのものよりなるほどって思ったことが鑑賞として楽しかった。だから何かに貢献したいというより、私自身が作品のことを知りたかった。

竹中：一番の理由は「札幌」「国際」という言葉に興味を持ったからです。中・高と国際交流って楽しいなと感じていたので、どんなトピックにせよ外国から札幌にいろいろなものが集まるって面白そう！って思いました。ちょうど大学が休みになる期間と重なり、時間も確保できました。

プレイベントはどうでしたか？

Photo：FUJIKURA Tsubasa

宮川：空いている時間に、写真撮影のお手伝いをしてあげてくださいと言われたので、雪像彫刻を見ている方に撮りましょうかと声をかけるようにしてました。そうしたら、「いいんですか？お願いします」と、かなりの数を撮ることになりました。映えスポットというのか、作品と一緒に自分が写りたい人は多いんだなぁと感じました。

谷口：大通公園を西へ向かって歩いてくる方々が、雪像彫刻を見た瞬間「何か違うよね」「綺麗だね」とお話しされていて「これは雪像彫刻なんです」と声をかけると入ってきてくださいました。研修で本郷新彫刻美術館の館長さんやアーティストから直接お話を伺ったことで、私自身が素敵な作品たちだと思えたし、自信を持ってお声かけすることができたのだと思います。来場者からも素敵という声が多くて、私の作品ではないのにまるで自分が褒められていると錯覚するくらいに。（笑）

猿橋：親子連れの方で、小さいお子さんが、（SIAFスクールの出前授業で子ども達がつくった）雪の降ってくる映像を楽しそうに見て「自分もやってみたい」と話されていたので。「じゃあよかったら、学校の先生に、雪まつりの会場でこんなものを見たんだって話してみて」って声をかけました。

これからSIAFに期待することは？

成田：自分自身がガイドツアーで作品のことを知りたい、そして自分が知ったことで誰かの作品の鑑賞を助ける。それは作品を鑑賞者に開いていく行動だなと思って。人を助けたいというよりは、私が作品の話をすることで、その人が今度美術館とかに行ってみようかなと、興味を持ってくれると嬉しい。それがお節介だと思われるのであればそういうことなのかもしれません。（笑）

谷口：まずは自分の知らないことを知れる、そしてそれを周りに話して一緒に行こうと言えるのが私の楽しみ。Yukikaki Reseach Stationのところでは、お客さまといろいろな会話を楽しむことができたのが私にとって収穫だったと思います。そういう楽しみ方をこれからもできると嬉しい。

竹中：SIAFがなかったらアートに触れる機会はなかったので。定期的にあると動機になります。SIAFの魅力は色々な種類のアートが集まってくること、最新に触れられること。バラエティの豊富さだと思います。